



第十二卷第二號

子どものしもべ

先生だと思ふから間違ふのです。私達は子供に仕へるのです。私達の苦心はどうかしたら一番よく子供の僕になれるかといふにありますが。子供が若し其の感じからでなく事實から私達を審くとしたら、私達は何たる不行届のものでせう。何たる間違ひだらけのものでせう。何たる無禮失敬な人間でせう。それも之れが眞實自分のありたけならばどうも仕方のないことですが、落ちどが餘り明か過ぎて何の言ひ譯けもないのです。私達は子どもの侶とか師とか言ひもし思ひもして居ながら、なかなか以て子供のことには祿に考へて居ないのです。私達は自分のこと許り考へて居ます。少くも子供のことを思ふよりも十倍も百倍も自分のことを考へて居ます。甚しきは子供の群の中に居ながら、心は自分のことで一ぱいであります。自分のことを思つて居る間に、子供の世話が不行届になります。我がこと許り考へて居るので、飛んだ間違ひを子供にします。うるさいといふ心も茲から出る。そんなさいといふことも茲から出る。毎日どの位子に子供に無禮をして居るか分りません。

こんな不忠實な僕がどこにありませう。こんな宥すべからざる僕がどこにありませう。主人のことよりも自分のことを餘計思ふ僕がどこにありませう。教うるよりも仕うるの難きかな。子供の爲に眞の僕となること、如何に難きかな。之れが私達のまことの嘆聲ではありますまいか。